

ユーザーレポート

User Report

～0の証明～

トラック

東日本海陸輸送株式会社

飲酒運転に対する認識の共有と、検知器による先進的な体制を評価。

北海道・札幌市に本拠を置き、首都圏・東海地方との長距離輸送を担う東日本海陸輸送株式会社。義務化と決まる前からアルコールインターロック「ALC-ZERO」を導入した理由や、運用を定着化させるためのポイント、運行管理上の基本姿勢などについて伺いました。

アルコールインターロック装置
ご利用機器 **ALC-ZERO**

プリンター内蔵型測定器
ALCminiII



運用ポイント 確かな運用を維持するためには相互の信頼関係構築が不可欠

松山氏：長距離輸送の場合、安全を確保するためには、一般の運送業以上に管理者と乗務員との信頼関係が重要です。その根幹が「飲酒運転は絶対にダメなんだ」という認識の共有。「言われたからやるのではなく、本人の意識を変える」。そのために管理者自ら積極的にコミュニケーションを図るよう心がけています。

ALC-ZERO、ALC-mini IIを導入するにあたり心掛けたのは、検査の30分前までに飲食を必ず終わらせる、食後のうがいを励行するといったルールの浸透でした。それをおろそかにしたために数値が出てしまったら、たとえお酒以外が原因だとしても乗務させるわけにはいきません。その周知徹底を図る一方、管理する我々も、アルコールを含む食べ物の中で反応数値が高いのは何かデータを細かく蓄積し、乗務員と共有していきました。「軽率な行為で乗務できなくなり、自分の人生を棒に振るのはやめよう」と繰り返し説明する中で、自律的な安全意識を醸成していったのです。

久保氏：この点については、新入社員研修から定期的なリスク管理研修、各種勉強会など、ことあるごとに説明し、運転歴30年以上のベテランから新人まで、浸透してきた実感があります。私も松山もドライバー出身で乗務員との仲間意識は強いほうですが、いいものはいいい、ダメなものはダメと、厳格に臨む姿勢は今も変わりません。

今後も機器の更新時期をみて、より精度の高い機種、さらには点呼等との連動性も視野に入れ、体制強化を図っていきたくと考えています。

取材後記 「悲惨な事故でお子様を亡くされた井上夫妻を招いての勉強会では、涙を浮かべる乗務員も多数いた」と語る久保・松山両氏。ルールづくりはもちろん、安全に対する想いを共有することも、社会的信頼を高めていく重要な要素なのだと感じた。

※文章、写真の無断転載や抜粋、加工は固くお断りいたします。



ALC-ZERO 導入の理由 コンプライアンス重視を追求する中でたどり着いた「飲んだら動かない」

久保氏：当社は、北海道と首都圏・東海地方を結ぶ長距離便をメインとし、1運行あたりおよそ5日、走行距離は2,000km以上に及びます。平成23年5月の法改正前から、当社の顧客である大手荷主は、すでにいくつかの拠点でアルコール検査を始めており、当社としてもコンプライアンス重視の考えに立って社内体制の見直しを進めていました。

「ALC-ZERO」を採用したのは、もちろん「アルコールを検知したらエンジンがかからない、車が動かない」というのが理由です。出発前の点呼でもALC-mini IIで検査しますが、5日間にわたる運行中の全行程を完全に管理することはできません。荷主企業からの信頼をより高め、同時に乗務員自身の安全を守る意味でも、「ALC-ZERO」が適していると考えました。導入時に荷主企業を訪問して説明した際、先進的な体制として高く評価していただいたのを覚えています。「飲酒勤務は絶対にさせない」という当社の姿勢をPRする意味でも、よい結果をもたらしました。

取材ご協力

東日本海陸輸送株式会社

営業本部 部長 久保 信一 様
営業本部 業務課 主任 松山 直樹 様

〒003-0030
北海道札幌市白石区流通センター5-2-87
TEL 011-867-2200 FAX 011-867-2201

